

国際交流から得た地域づくり

～国際交流のまち当別町～

石狩平野の北西部に広がる大地、石狩川とその支流に広がる田園風景と雄大な自然環境、石狩湾を遠望する丘陵には北欧の顔をもつ住宅が緑と調和し、道民の森には長い風雪に耐えた巨木が今なおそびえている。

当別町は、風景が酷似しているといわれるスウェーデン王国・レクサンド市との姉妹都市提携をメインとした、積極的な国際交流の町として大きな飛躍が期待されている。また、当別町では今、先人の開拓の営みにより築かれ、残されてきた、この美しい景観をより美しい姿で後世に引き継いでいくとともに、主産業である農業の経営体質強化に向けた取組を始めている。

今回は、こうした取組の中核を担う当別町役場の泉亭町長に、国際交流とまちづくりのこれまでの経緯と現状、また今後の抱負をうかがった。

当別町は

当別町は、札幌市と境界を接し、札幌都心部から約15～25kmに位置している。1871年(明治4年)、仙台藩岩出山の領主・伊達邦直公が家臣共々移住、人々の開拓の努力により、1900年代には札幌支庁(当時)管内で最も豊かな農村へと発展し、農業を基幹産業とした町の礎が築かれた。現在では、石狩支庁管内第一位の農業産出額(畜産を除く)を誇っている。また、切り花の生産も盛んで、道内屈指の生産額となっている。

近年は、札幌市や江別市という産業・人口集積地に隣接し、石狩湾新港と新千歳空港を結ぶ交通の要衝であること、1988年の札幌大橋開通やJR学園都市線の増便などから、宅地造成が拡大、人口約2万400人の札幌近郊の田園都市として発展している。

スウェーデンとの姉妹都市交流

北海道内でも数少ない、待開拓に始まる農業の町・当別町がスウェーデン王国レクサンド市との姉妹都市交流を行うきっかけとなったのは、スウェーデン村の構想からだ。

1978年、都倉栄二元スウェーデン大使が、現スウェーデン・ヒルズ隣接のゴルフ場に来た際、開口一番「ストックホルム郊外の風景

にとっても似ている」と感想を述べ、スウェーデン王国から帰任の折、国王よりスウェーデンと日本との交流の足がかりが欲しいと依頼されていた経緯があったことから、気候、風土の良く似たこの場所に交流拠点を建設してはどうかと提案。翌'79年、北洋交易(株)グリーンタウン事業部が「スウェーデン村計画」を提示、当別町が「スウェーデン・北海道産業文化提携会議」で誘致を表明。'84年に着工し、緑に包まれた北欧風のニュータウン「スウェーデン・ヒルズ」が誕生することとなる。また、'83年には(財)スウェーデン交流センターが設立され、'86年にはスウェーデン交流センターが落成した。

スウェーデン・ヒルズは、自然と調和した街並みや、地区全体の統一性と美観を確保するための屋根や外壁の基本色、門扉は作らないなどを内容とする住民全員が守らなければならない建築協定など、その個性豊かな美しい街づくりで、1991、92年と連続して「北海道街づくり100選」に選ばれている。

スウェーデン交流センターは、国際交流拠点としての役割を果たすとともに、スウェーデンの技術者を招聘し、ガラス、家具等のハンドクラフト技術を普及させる活動も行って



スウェーデン交流センター

いる。

1983年、駐日スウェーデン大使ロネウス夫妻が来町、翌年、大使の紹介で公式訪問が実現。訪問の際、日本大使やコッパルベリイ県知事に姉妹都市の推薦を依頼、紹介されたのがレクサンド市だった。

レクサンド市は、スウェーデン王国の首都ストックホルム市から北西に約250kmに位置する人口約15,500人のまちで、面積は1,227.5km²（当別町の約3倍）、そのうちの80%が森と湖。レクサンド市を含むダーラナ地方は、広大な森林に囲まれたシリアン湖を中心に豊かな自然とスウェーデンの伝統・文化が色濃く残っている地域である。

1986年8月、スウェーデン交流センターのオープンに合わせて、前レクサンド市長ドーベルスコグ夫妻等一行が来町、覚書を交換。翌年10月、当別町長を団長とする使節団がレクサンド市で姉妹都市提携の調印をした。調印と同時に民間の任意団体「当別・レクサンド都市交流協会」が設立され、レクサンド市への訪問団派遣事業や青少年の人的交流事業を実施している。

提携の年1984年から始まった国際交流の証である夏至祭も20回を数え、年々その内容は充実し、ますます交流が活発になってきたことを垣間見ることができる。夏至祭は北欧、特にスウェーデンで盛大に行われる行事の一つで、夏の訪れを祝い、村の平和を願う伝統的な祭り。例年、1,000人以上の参加者が集まり、スウェーデン・ヒルズの公園や広場を会場に夏の訪れを祝う。祭りは白樺の枝葉を編んだ冠リース作りから始ま



夏至祭

り、花や葉で飾った十字架の形に似せたマイストングと言われる夏至柱を囲んで輪になり、フォークダンスを踊り、クラシックコンサートやガラス製作体験などを楽しむ。



西村企画課長

「今後も人的交流を続け、さらに環境、教育、文化、福祉、経済などの交流にも力を入れたい」と当別町の西村企画課長は強調する。

美しいまち当別をみんなで

こうした中、1998（平成10）年7月、農山村地域や都市の近郊に優良な住宅の建設を促進し、健康的でゆとりのある生活の確保を図ることを目的に「優良田園住宅の建設の促進に関する法律」が施行された。多くの課題を抱える農村地域にとって、都市部からの移住の促進や地域との交流の拡大など新たな地域づくりの可能性を広げる施策のひとつとして期待されている。

2003（平成15）年12月、当別町は「当別町優良田園住宅の建設の促進に関する基本方針」を策定した。この中の「基本理念」には、「近年、都市住民を中心に都会を離れ、みどり豊かな農村地域でゆったりと暮らすルーラル・ライフ（田舎暮らし）が注目されている。その一方で、農産物輸入の自由化などにより農業を取り巻く環境は厳しさを増しており、都市部への人口流出や後継者不足、離農希望者の増加から遊休農地の増加が深刻な問題となりつつある」と現状を認識したうえで、「札幌市に隣接し、JRや道路網の充実による恵まれた立地条件や道民の森を抱える豊かな大自然を背景に、潜在的な移住希望の需要が増加している」とし、「優良田園住宅の建設に当たっては、地域の自然環境の保全と調和に最大限配慮するとともに、地域の資源や特性を活用した豊かな自然環境での生活を促進し、地域コミュニティとの交流を推進する」とうたっている。また、2002（平成14）年3月には、「美しいまち当別をみんなでつくる条例」を策定しており、「先人が伝えてくれた当別の自然と生活文化を生かし、一人ひとりが主役となって、まちづくりを進めるために、この条例を制定した。また、美しいまち当別をみんな

でつくるために当別町と住民及び事業者の役割を明らかにし、美しいまちづくりの推進に関する基本的な事項を定めることで、当別の付加価値を高め、住民が誇りをもって快適に暮らせる美しく心地よいまちの実現を目的としています」と竹原まちづくり推進課長はいう。



竹原まちづくり推進課長

当別ブランドづくり

豊かで美しい田園都市を支えるのは安定した地域農業である。これまで米作り農家は、減反という生産調整のしくみで需給を調整されてきた。けれども、減反面積そのものは達成できても、技術の向上・食生活の変化などから米が余って価格が低下するという事態が起こった。「そこで、今までのように、収穫量の上がる品種の大量生産ではなく、“生産数量”を調整し、おいしい米づくりが大事だと考えました。化学肥料や農薬を利用する量で勝負をする米作りは通用しません。消費者の安全志向や価格志向を重視した流通・販売システムの下で、付加価値を高める“ブランド化”を進めなければならない。「当別町の主産業は農業です。町農業の将来を明るいものにしなければ、町の衰退につながる。大都市に隣接した都市近郊農業地域として“当別ブランド”作りを進めていくことがぜひ必要なのです」と当別町長泉亭俊彦氏は熱っぽく語り、その手段としての農業経営体について、次のように持論を展開してくれた。

新しい農業経営体へ

これからの農業は、農地を所有しているだけでは農業経営を続けられなくなる。持続的に農業を行うため個人農業を続けることに頼らず、地域の後継者である若い人や女性も入った経営体を作り、お互いが協力し合いながら地域農業を継続させる体制が不可欠だと考えている。もしも、経営体に異業種参入も必要と判断されれば、行政としてサポートしていく。また、経営体所有の大農場を美しく整備し、農村景観を素晴らしくすると、都会からの農業従事者の誘致、農村の価値の高まりなど、新たなまちづくりにとっても非常に有

効なものと思っている。

このためには、農業経営の新しい仕組み「農業プロ集団」を作る必要がある。

現在転作政策上のグループを基本にして、それぞれのグループが一つの経営組織体として協力しあうようにする。どのように組み合わせるかは農家同士で協議してもらい、全ての農家を対象として、JAなども参画して決めようと思っている。それぞれの経営体は、法人登記まではしなくても、一定の協定により代表者を決めて経営体の役割をもたせる。したがって、行政は、“産地づくり”や“農村づくり”について、農家一戸ずつではなく、経営体単位で相談・調整業務を行う。そして、数個の経営体はそれぞれ法人経営をめざす。

最後に泉亭町長は、「先人の歴史を踏まえ、スウェーデンとの国際文化交流など、当別町固有の資源を最大限に活用して、美しく、個性的で、町民が誇りを感じるまちづくりを」と今後の展望を語ってくれた。



泉亭町長

スウェーデンとの国際交流から得たものは、地域の自然環境を

手入れすることによって、さらに美しいまちづくりができるという自信と地域資源（農業）を活かし、まち全体を北欧のような、豊かな田園をコンセプトとしたまちづくりへの意欲であった。

都市と農村の生活者の対流、札幌圏へ連動する動きが当別町のさらなる発展へつながることが期待される。

ホームページ

[http://www.town.tobetsu.](http://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/)

[hokkaido.jp/](http://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/)